

『龍泉景川隆禪師行狀』訓注

日比野 晃

はじめに

景川宗隆は一四二五年（応永三三）に伊勢（三重県）に生まれ、

幼少にて出家して日峰宗舜の法嗣である雲谷玄祥・義天玄詔・桃隠玄朔に歴参し、雪江宗深に参じて契悟した。その後、犬山市の青龍山瑞泉寺塔頭龍泉院を建立した。そして奈良県の大龍山興雲寺、三重県の慈恩山瑞応寺、京都市の長松山大心院を開山し、また京都市の龍宝山大徳寺・正法山妙心寺、犬山市の青龍山瑞泉寺、京都市の大雲山龍安寺、京都府の八木山龍興寺、四日市市の保福山大樹寺に歴在した。このように近畿・中部圏を中心に禅宗寺院を開き、また、禅宗の教化を展開した。そして一五〇〇年（明応九）年に七六歳にて死去した。

本稿は、景川の法嗣である景堂玄訥の依頼によって、景川の法弟である特芳禅傑の法嗣の大休宗休が、一五三六年（天文五）に著わした正保三年（一六四六）版本（駒沢大学・龍谷大学図書館蔵）を底本にし、一七五八年（宝暦八）に慈眼童沐が編した『龍泉景川和尚語録』（龍谷大学図書館蔵）を参考にして作成した。それらには、

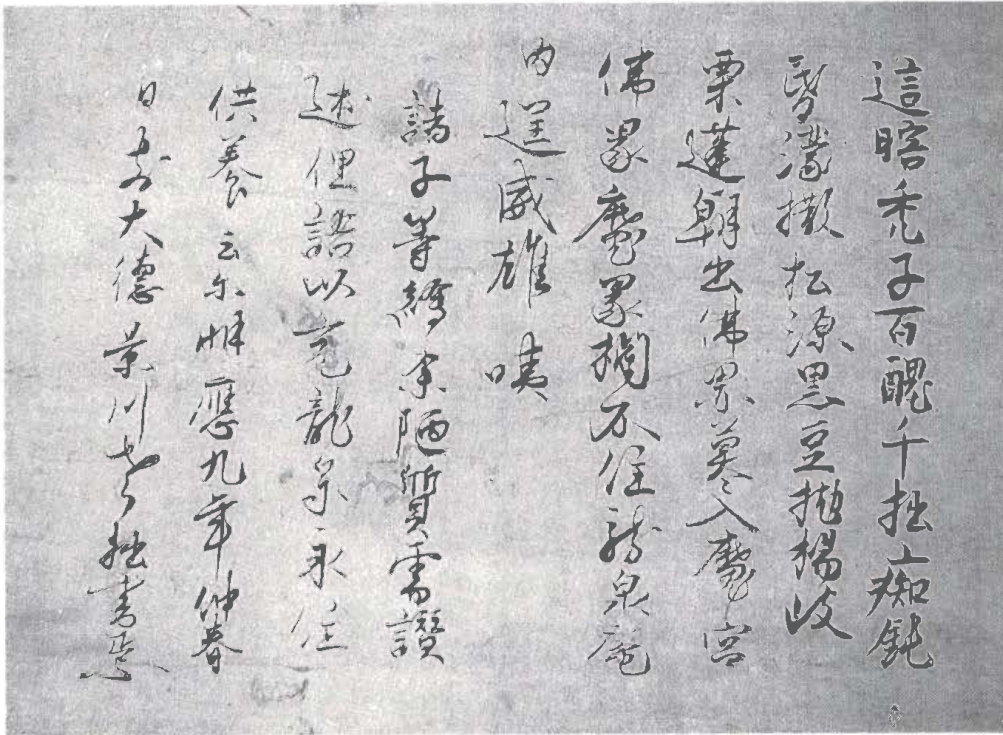
各々返り点や送り仮名が版刻されているが、それに従わないで独自に訓読したので、掲載の原文は白文にした。そして句読点・段落は筆者が適宜につけた。

また、語句の注は、原文の右側に（）をつけて、番号を付し、末尾にまとめて記した。

なお、『龍泉景川隆禪師行狀』に記述された内容は、実際のそれと矛盾している所がある。例えば、『行狀』では、景川は愚溪寺にいた義天の所へ行き、義天が龍安寺造立のために上洛したのと同行了したとなっている。けれども、実際は義天が京都の退蔵院にいた時に細川勝元から龍安寺造立の依頼があり、その時そこに景川はいなかった。しかし、今回は「行狀」の内容の検討には入らなかった。

「行狀」の内容の検討は、日峰・桃隠・雲谷・義天・雪江などの書簡・語録等を総合的に検討する中で進めなければならないので、今後の課題としたい。

本稿作成にあたって、関董光禪師と余語富雄学兄に大変お世話になったことを記し、ここに深く感謝します。



景川宗隆讚（下段右の自讚頂相の讚を拡大）

景川宗隆自讚頂相



瑞泉寺塔頭 龍泉院藏

景川宗隆讚（右の自讚頂相の讚）

這瞎禿子、百醜千拙、痴鈍
昏濛、撒松源黑豆、拋揚岐
栗蓬、朝出佛界、暮入魔宮、
佛衆魔衆攔不住、龍泉庵
内逞威雄、噴
諸子等繪余陋質需讚、
述俚語以充龍泉永住
供養云尔、明應九年仲春
日、前大德景川老拙書焉

龍泉景川隆禪行狀

法姪⁽¹⁾ 大休宗休撰⁽²⁾

龍泉景川隆禪師行狀

法姪⁽¹⁾ 大休宗休撰⁽²⁾

師、諱宗隆⁽³⁾、號景川⁽⁴⁾。佛日禪師第一之神足也⁽⁶⁾。

師、諱は宗隆⁽³⁾、景川と号す。仏日禪師第一の神足なり。姓は平氏。

姓平氏。本貫、伊陽人⁽⁷⁾。誕而穎利如錐處囊中⁽⁸⁾。

本貫、伊陽人。誕れて穎利なること錐の囊中に処するが如し。

及長、父攜投于本州圓明寺雜染焉⁽¹⁰⁾。師、素有

長ずるに及んで、父攜えて本州の円明寺に投じて雑染せしむ。師、

參方之志⁽¹³⁾。迨十九歲、乃出本州抵尾之瑞泉、見

素より參方の志有り。十九歳に迨びて、乃ち本州を出て尾の瑞泉に抵

雲谷祥禪師⁽¹⁵⁾。便具威儀詣丈室、稟日⁽¹⁷⁾、新到相看⁽¹⁸⁾。

て、雲谷祥禪師に見ゆ。便ち威儀を具して丈室に詣り、稟して曰わく

谷示曰、釋迦・彌勒是他奴、他是阿誰⁽¹⁹⁾。師、三

「新到相看」。谷示して曰わく「釈迦・彌勒は是れ他の奴、他は是れ

拜而退。於是日日提撕⁽²⁰⁾、時時參究⁽²¹⁾。三條椽下、

阿誰なるか」。師、三拜して退く。是に於いて日日提撕し、時時參究

七尺單前、脇不著席。困即以巾繫柱、自縛不動。

す。三條椽下、七尺単前、脇席に著かず。困すれば即ち巾を以て柱に

若此而歷三周寒暑、未克開發。竊嘆曰、佛、有

繫け、自縛して動かさず。此くの若くにして三周寒暑を歴れども、未だ、

大方便不能度無緣。吾於和尚無緣耶。詣丈室請

開發すること克せず。竊に嘆じて曰わく「仏、大方便有れども無緣を

暇之次、問曰、如何是佛法的大意⁽²³⁾。谷曰、何

度すること能わず。吾和尚に於いて縁無きか」と。丈室に詣りて請暇

不向無寸艸處去。師曰、如何是無寸艸處。谷曰、

するの次いで、問いて曰わく「如何なるか是れ仏法的大意」。谷

出門便是艸。師、佛袖而去。

遂適濃陽愚谿參見義天承和尚、扣以前話。未歷三日有省。自爾以來、寅夕孜孜。

時義天祖、應管領細川勝元公請赴于輦下。師亦與俱。洛之北山有形勝之地。乃野寺舊址也。

勝元公、與義天祖謀創龍安精舍。從覆簣之日徒衆不堪土木之役、稍稍引去。

師、聞桃隱朔禪師居讚岐慈明菴頗有風穴・揚岐之風、往謁焉。纔展炊巾問曰、如何是佛法的大意。隱曰、吾宗無語句、又無一法與人。師曰、可謂、滿把驪珠擦向人也。隱曰、你識這般事便休。翌日茶話次、謂師曰、昨夜我夢、你到此。果然。隱師在彼不耐樵汲之勞。俄企伊陽之行。師亦從之。

曰わく「何ぞ寸草無き処に向かいて去らざる」。師曰わく「如何なるか是れ無寸草の処」。谷曰わく「門を出ずれば便ち是れ草」。師、仏袖して去る。

遂に濃陽の愚谿に適きて義天承和尚に參見し、扣くに前話を以てす。未だ三日を歴ずして省有り。爾より以來、寅夕孜孜たり。

時に義天祖、管領細川勝元公の請に應じて輦下に赴く。師も亦与俱す。洛の北山に形勝の地有り。乃ち野寺の旧址なり。勝元公、義天祖

ど謀つて龍安精舍を創む。覆簣の日より徒衆土木の役に堪えられず、稍稍として引去る。

師、桃隱朔禪師讚岐の慈明菴に居して頗る風穴・揚岐の風有りと聞き、往きて謁す。纔かに炊巾を展べて問いて曰わく「如何なるか是れ

仏法的の大意」。隱曰わく「吾が宗に語句無く、又一法の人に与え

る無し」。師曰わく「謂うべし、滿把の驪珠人に擦向す」。隱曰わく「你這般の事を識らば便ち休せよ」。翌日茶話の次いで、師に謂いて

隱師寓居于保保鄉⁽⁴¹⁾。朝倉氏捨私第立大樹寺⁽⁴³⁾、

招隱師居焉。學徒輻湊⁽⁴⁴⁾。師、嘗參鼈鼻蛇話⁽⁴⁵⁾、杜

口三年。

歸洛龍安、再參義天祖。祖翁住持事繁、不克

遂心。

卻回大樹⁽⁴⁶⁾。隱、又示以保福喫茶去話⁽⁴⁷⁾。在彼者

三年、又入洛見義天祖不契。遂歸桃隱會裏⁽⁴⁸⁾。隱

師、見來拶曰、來來去去作什麼。師曰、始隨芳

艸去、又逐落花回⁽⁴⁹⁾。隱、呵呵大笑。因侍于隱師

左右者十三歲。參得碧巖百則公案了也⁽⁵⁰⁾。既而隱

師不安臨溘然⁽⁵³⁾、欲接師。師、不能契會⁽⁵⁴⁾。隱、擲

竹篋⁽⁵⁵⁾而逝。師、侍塔下五旬、後入龍安丈室、參

得許多話頭⁽⁵⁶⁾。義天、尋而遷化。佛日禪師雪江、

繼席。

曰わく「昨夜我夢みらく、你此に到ると。果して然り」。隱師彼に在

りて樵汲の勞に耐えず。俄かに伊陽の行を企つ。師も亦之れに従う。

隱師、保保の郷に寓居す。朝倉氏私第を捨てて大樹寺を立て、隱師

を招いて居らしむ。學徒輻湊す。師、嘗て鼈鼻蛇の話に參して、口を

杜ざすこと三年。

洛の龍安に歸りて、再び義天祖に參ず。祖翁住持事繁くして、志を

遂げること克せず。

大樹に却回す。隱、又示すに保福喫茶去の話をして。彼に在る者

三年、又洛に入りて義天祖に見ゆるも契せず。遂に桃隱の會裏に歸る。

隱師、来るを見て拶して曰わく「來來去去して什麼をかせん」。師曰

わく「始めは芳草に随つて去り、又落花を逐つて回る」と。隱、呵呵

大笑す。因つて隱師の左右に侍する者十三歲。碧巖百則の公案に參得

し了れり。既に隱師不安溘然に臨んで、師を接せんと欲す。師、契會

すること能わず。隱、竹篋を擲つて逝す。師、塔下に侍すること五旬、

師、一日在佛日會下、豁然大悟。呈投機偈曰、
痛棒機先不讓師、一拳拳倒五須彌。威風凜凜徧

天地。三拜慙慙依位時、佛日印之曰、臨濟正宗、

自從百丈・黃檗闡大機發大用、脫羅籠、出窠臼。

虎驟龍馳、雷轟電激。卷舒擒縱、皆據本分。綿

綿密密、從松源正到山野、其派脈已十一傳了也。

宗隆藏主、多年入余室中朝參暮請、闡大機發大

用、大徹大悟領略得從上祖師嶮峻一著子。可謂、

吾家真種艸也。宜荷擔正宗建大法幢、爍大法炬

而化導群盲、以起臨濟正宗者也。思之、珍重。

寛正五年佛成道日、雪江宗深、於龍安室內書之

以爲證明。

師、自受印證酬對如響、機鋒無敵。群衲磨瑩、

四海鶴望。和之甲族、越智匠作築家、請師日夕

後龍安の丈室に入りて、許多の話題に參得す。義天、尋で遷化す。仏
日禪師雪江、席を継ぐ。

師、一日仏日の會下に在りて、豁然大悟。投機の偈を呈して曰わく

「痛棒機先師に譲らず、一拳に拳倒す五須彌。威風凜凜として天地に

徧し」と。三拜慙慙として位に依る時、仏日之れを印して曰わく「臨

濟の正宗、百丈・黃檗大機を闡き大用を發してより、羅籠を脱し、窠

臼を出ず。虎驟り龍馳せ、雷轟き電激す。卷舒擒縱、皆本分に拠る。

綿綿密密、松源より正に山野に到り、其の派脈已に十一傳了れり。

宗隆藏主、多年余が室中に入りて朝參暮請、大機を闡き大用を發し、

大徹大悟して從上の祖師嶮峻の一著子を領略し得たり。謂うべし、吾

が家真の種草なりと。宜しく正宗を荷担して大法幢を建て、大法炬を

爍して群盲を化導し、以て臨濟の正宗を起こすべき者なり。之れを

思え、珍重。寛正五年仏成道の日、雪江宗深、龍安室内に於て之れを

書して証明となす」。

勤于参扣⁽⁹²⁾。因卜一牛鳴地而、山曰大龍寺曰興雲⁽⁹⁴⁾。

師、以義天祖爲開山。

既而洛之大德虛席⁽⁹⁵⁾。特降綸綍⁽⁹⁶⁾、命師爲國開堂

演法。玉音重降⁽⁹⁷⁾、董妙心之席者兩次。尋住尾之

瑞泉、洛之龍安、丹之龍興、伊之大樹而、匡衆

領徒。叢規井井⁽¹⁰⁰⁾。細川右京兆政元、開創大心精

廬⁽¹⁰²⁾、迎師住持。公亦隨衆入室參禪、又爲萱堂春

林寺殿、盡七并大祥忌⁽¹⁰⁴⁾、請師陞座說法⁽¹⁰⁵⁾。亦一時

之盛也。

明應九年、師年七十六歲、春示微疾。藥劑不

效。三月朔旦、自執筆書遺偈曰、元本無明⁽¹⁰⁷⁾、七

十六歲、末後牢關⁽¹⁰⁸⁾、三千條罪。喝、兩喝。擲筆

示寂。諸徒、依遺命藏全身於花園西南之隅。爲縛

一菴號龍泉、築方墳扁大龜。法弟特芳⁽¹⁰⁹⁾、書額。

師、印証を受けしより酬對響くが如く、機鋒敵なし。群衲磨臻し、

四海鶴望す。和の甲族、越智の匠作栄家、師を請して日夕参扣に勤む。

因つて一牛鳴地を卜して、山を大龍と曰い寺を興雲と曰う。師、義天

祖を以て開山となす。

既にして洛の大德席を虚うす。特に綸綍を降して、師に命じて国の

爲に開堂演法せしむ。玉音重ねて降りて、妙心の席を董す者兩次。尋

で尾の瑞泉、洛の龍安、丹の龍興、伊の大樹に住して、衆を匡し徒を

領す。叢規井井たり。細川右京兆政元、大心精廬を開創して、師を住

持に迎う。公も亦衆に随つて入室參禪、又萱堂春林寺殿の爲に、盡七

并に大祥忌、師を請して陞座說法せしむ。亦一時の盛なり。

明應九年、師年七十六歲、春微疾を示す。藥劑效あらず。三月朔旦、

自ら筆を執つて遺偈を書して曰わく「元本の無明、七十六歲、末後の

牢關、三千條の罪」と。喝、兩喝。筆を擲つて示寂す。諸徒、遺命に

依りて全身を花園西南の隅に蔵む。爲に一菴を縛して龍泉と号し、方

蓋師之顧命也。

嗣其法者、十有二人。西浦肅・春江蓓・悦堂

懌⁽¹¹⁰⁾、共住大德。柏庭松・松嶽繕・景堂訥⁽¹¹¹⁾、視篆⁽¹¹²⁾

妙心。清巖以・嬾室牧・啓菴迪・月谿紀・高安

邵・景趙諗⁽¹¹³⁾、或闡化於一方、或韜晦⁽¹¹⁴⁾以終世。

嗚呼、師之道德、昭昭⁽¹¹⁵⁾如日。所謂、碧落碑⁽¹¹⁶⁾、

無贗本者歟。

龍泉塔司景堂老禪⁽¹¹⁷⁾、一日袖書卷來、示予曰、

是吾景川老漢行實也。出處顛末、請爲記之。予、

以不敏固辭再三。請而不允。仍攜俚語聊記其概

云。

時天文丙申林鐘⁽¹¹⁹⁾下院⁽¹²⁰⁾、法姪宗休焚香謹書

龍泉景川隆禪師行狀 終

墳を築きて大龜と扁す。法弟特芳、額を書す。蓋^{けだ}し師の顧命なり。

其の法を嗣^つぐ者、十有二人。西浦肅・春江蓓・悦堂懌、共に大德に

住す。柏庭松・松嶽繕・景堂訥、妙心に視篆^{してん}す。清巖以・嬾室牧・啓

菴迪・月谿紀・高安邵・景趙諗、或いは化を一方に闡^{ひら}き、或いは韜晦^{とうかい}

して以て世を終^おう。

嗚呼^あ、師の道德、昭昭として日の如し。謂^いう所、碧落の碑、贗本無

き者^{こと}か。

龍泉塔司景堂老禪^{たつす}、一日書卷を袖にし來たつて、予に示して曰わく

「是れ吾が景川老漢の行実なり。出處の顛末^{てんまつ}、為に之れを記せよ」と

請う。予、不敏を以て固辭すること再三。請いて允^{ゆる}さず。仍^よつて俚語

を攜^のて聊^おか其の概^おを記すと云う。

時に天文丙申林鐘下院にて、法姪宗休焚香し謹んで書す。

龍泉景川隆禪師行狀 終

注

- (1) 法姪 景川宗隆を中心にと、特芳禪傑は日峰宗舜の兄弟弟子であり、特芳の弟子は景川の姪に当たる。
 「姪」は、現代の日本では女性名詞で使われているが、もともと中国では男女両用に使用されていた。
- (2) 大休宗休 特芳禪傑の弟子。妙心寺一二世・瑞泉寺一九世の住持。
- (3) 諱宗隆 生前の名を、宗隆。人が死ぬと、生前の名を呼ぶのを忌むことから「いみな」と云う。
- (4) 號景川 呼び名は、景川。この号について、龍谷大学図書館蔵の「龍泉景川隆禪師行狀」の末尾に、次の文が墨書されている。
 「宗隆藏主需雅稱、字之云景川。仍述一偈以還之了也。虎丘瞻戀老勒巴、濯錦江頭歲月除、更仰拳拳高一着、風流結得惡冤家。
 時寛正六稔臘月初吉。前大德雪江老拙書之」
 この墨書の内容が正しいとすれば、雪江は景川に印可を授けた一年後に号を与えたことになる。
- (5) 佛日禪師 雪江宗深（一四〇八〜一四八六）。雪江の勅諡が佛日眞照禪師。
- (6) 神足 優秀な弟子。
- (7) 本貫、伊陽人 本籍は、伊勢国（現在、三重県の東部）の人。
- (8) 穎利 伶俐と同義語。利発。
- (9) 囊中處錐 袋の中に錐を入れれば穂先が出て直ぐ知れるように、賢い人物は必ず名声を挙げるものであるという喩え。「史記」平原君の虞卿列伝にある故事。
- (10) 本州 「州」は中国において地方行政区画の称であった。それを日本では、律令の国郡制以降に整備・展開され、中世以後も守護制・守護大名制・大名領国制の中で継承された国の呼称にして、尾張国を中国風に「尾州」などと云った。
 ここで云う本州は、師（景川宗隆）の生国（伊勢）を指す。
- (11) 圓明寺 現在の津市岩田にあった岩田山円明寺（真言宗）か。
- (12) 薙染 剃髪染衣の略。剃髪して僧となること。
- (13) 參方 參叩遊方の略。行脚して優れた師家に參禪遊歴すること。
- (14) 尾之瑞泉 尾張国（現在、愛知県西部）の青龍山瑞泉寺。
- (15) 雲谷祥禪師 雲谷玄祥（一四〇二〜一四五六）。日峰宗舜の弟子。
- (16) 丈室 方丈の室。住持（住職）の居室。
- (17) 稟曰 謹んで申し上げる。
- (18) 新到相看 新到とは、禪寺に入り僧堂で修行生活に入る新參の僧。相看は拜謁を意味し、ここでは、「禪苑清規」一掛搭にある「具威儀三袖三祠部、於堂司相看、尋行者報維那云、新到相看相見各觸礼三拜」の行法。
- (19) 釋迦……阿誰 これは「東山阿誰」と云われるもので、「無門関」四五則に「東山演師祖曰、釋迦・彌勒、猶是他奴。且道、他是阿誰。無門曰、若也見得他一分曉、譬如十字街頭撞見親爺相似、更不須問別人、道是與不是」とある。これは「絶対主

「体」を確立した人こそ「真人」であることを云っている。

(20) 日日提撕 毎日、古則・公案などをいろいろ考へること。

(21) 時時參究 何時も、師家の下で參禪して悟りを得ようとするこ
と。

(22) 三條椽下、七尺單前 【碧巖録】第四九則に「諸人且向三條椽
下、七尺單前、試定當看」とあり、三條椽下とは僧堂内の各自
の座禪する坐位。大体、横が三尺、縦が七尺の所に坐臥する。横
が三尺の間の上部に椽が三本あるところから云う。七尺單前もそ
の空間表現から一人分の坐床。

(23) 佛法的的大意 的とは鮮明で確かなさまのこと。

【從容録】第八六則に「臨濟、問「黄檗」。如何是佛法的的大意。
檗便打。如是三度、乃辞「檗見」大愚」。愚問、甚麼處來。濟云、
黄檗來。愚云、黄檗有何言句」。濟云、某甲三問「佛法的的大意」、
三度喫「棒。不「知有「過無「過。愚云、黄檗恁麼老婆、為「憍得「徹
困」、更來問「有過無過」。濟、於「言下「大悟」とある。これは佛
法の會得が言葉や思考によつて得られるものでないことを示して
いる。

(24) 拂袖 礼拝する。決然として去るさま。

(25) 濃陽愚谿 美濃国（現在、岐阜県南部）の、大智山愚谿寺。

日峰宗舜が春木郷末国（現在、岐阜県御嵩町中央部カ）に作つ
た無著庵が始まりとされるが、その後、愚谿寺となり、江戸時代
末期に現在地（岐阜県御嵩町）へ移転した。

(26) 義天承和尚 義天玄詔（一三九二〜一四六二）日峰宗舜の弟子。

(27) 寅夕孜孜 一日中、努めいそしむさま。

(28) 細川勝元 室町時代の武將で、一四四五〜一四四九年、一四五
二〜一四六四年、一四六八〜一四七三年と、三度管領となった。

(29) 輦下 天皇の車のもと。皇居のある所。

(30) 龍安精舎 現在、京都市の大雲山龍安寺。

(31) 覆簣 土籠をくつがえす。土木工事を始める。

(32) 稍稍 だんだんと。次第に。

(33) 桃隱朔禪師 桃隱玄朔（？〜一四六一）。日峰宗舜の弟子。

(34) 慈明菴 現存しないが、現在の高松市中央町にある金重山慈恩
寺の起源になっている。その根拠として、「犬山里語記」巻の四

の瑞泉寺の章に「本源塔 方丈北の山上に有。日峰和尚の遺髮
を納し墓也。享和二年戊秋、讚岐國高松鍾山慈恩寺より當山へ贈
り来る。仍て築之」とあり、現在も瑞泉寺にある本源塔の台座に
は「敕諭禪源大濟禪師諱宗舜、字日峯。関山國師四世孫而、應永
廿二乙未歲創開此山」。永享之始、膺于妙心中興之選、移居
于洛而、猶拳拳不忘故山」。暫令門弟看院、師不戰化、前
輪番之旨告于義天和尚」。茲補其師席者、義天・雲谷・桃隱・
雪江四和尚接踵而承、循而又環。各創退居于山中翼賛叢規、
從文明年間迄明應之末、景川・悟溪・特芳・東陽四和尚輪次
視家、闡揚門風」。且營別院、黼黻紀綱、子子孫孫今猶存矣。
師歲向八十一住大德寺、有三山門之法語。曰、虛堂八十再住山、
老僧八十初入寺。翌歲文安五戊辰正月廿六日示寂於正法山」。

諸徒奉其全身塔于養源、如其遺髮留于在讚州

禪利」。今三百五十有餘歲而傳承于當山。因造塔藏焉。以祝遠代云。時享和二年壬戌秋。衆等謹造立之者也」と刻まれている。

慈恩寺の山号が「犬山里語記」では「鍾山」となっているが、鍾と云う字を二字に分離すると金重となり、同じ寺である。

桃隠玄朔がその師の遺髪を慈明庵へ持ち帰って造塔した。しかし、桃隠なきあと歳月は流れ、慈明庵は慈恩寺となり、一八〇二年（享和二）に、日峰の遺髪は日峰との関係が深い瑞泉寺へ贈られた。と、考えることができる。

(35) 風穴 風穴延沼（八九六〜九七三）。中国の臨濟宗の僧で、一〇世紀後半に盛んに大衆を教化した。

(36) 揚岐 揚岐方会（九九三〜一〇四六）。一一世紀前半に臨濟の禪風を揚げ、後世に揚岐派と云われるようになった。臨濟宗揚岐派は中国禪宗五家七宗の一であるが、虎丘紹隆（一〇七七〜一一三六）の頃に全盛を迎えた。日本より入宋・入元して臨濟禪を伝えた人々や、宋・元より来日した禅僧たちは、宋西以外すべてがこの揚岐派の禪を伝えた。

(37) 又無一法與人 【景德伝灯録】卷第一五の徳山宣鑑の項に「雪峰問、従上宗風以何法示人。師曰、我宗無語句、実無一法與人」とある。

(38) 滿把驪珠 両手に満ちる程の、命がけで求めなければ得られない貴重なもの。

(39) 擦向 擦向と云う熟語はないが、擦は利とも云い、利は塔の心柱を意味するから、中心に向かうと云う意味を表現しようとした

のか。

(40) 樵汲 薪を採り、水を汲む。

(41) 保保郷 現在、四日市市市場町。

(42) 朝倉氏 伊勢北部の国人領主で、室町幕府の奉公衆に属していた。

(43) 大樹寺 現在、四日市市の保福山大樹寺。

(44) 輻湊 物事が一ヶ所に集まること。

(45) 龍鼻蛇話 【碧巖録】第二二則に「雪峰示衆云、南山有二条龍鼻蛇。汝等諸人、切須好看。長慶云、今日堂中、大有二人喪身失命。僧舉似玄沙。玄沙云、須是稜兄始得。雖一然如此、我即不恁麼。僧云、和尚什麼生。玄沙云、用南山作什麼。雲門以拄杖攬向雪峰面前、作怕勢」とある。これは長慶・玄沙・雲門の三人三様によって伝道修学のあり方が示されている。

(46) 卻回 退き帰る。

(47) 保福喫茶去 【景德伝灯録】卷第一九の保福院從展の項に「長慶稜和尚有時云、寧説阿羅漢有三毒、不説如來有二種語。不説如來無語、只是無二種語。師曰、作麼生是如來語。

師曰、情知和尚向第二頭道。長慶却問、作麼生是如來語。師曰、喫茶去」とある。これは抽象的な議論をするのではなく、日常的な実践の中に仏法があることを示している。

この商量（問答して審議すること）は、『碧巖録』第九五則に「長慶有時云、寧説阿羅漢有三毒、不説如來有二種語。不説如來無語、只是無二種語。保福云、作麼生是如來語。慶

云、聾人争得レ聞。保福云、情知你向第二頭道。慶云、作麼生是如來語。保福云、喫茶去」と本則に取り入れられている。

(48) 會裏 会下。門下。

(49) 又逐落花回 『碧巖録』第三六則に「首座問、和尚什麼處去來。

沙云、遊山來。首座云、到什麼處來。沙云、始隨芳草去、又逐落花回」とある。

(50) 參得 師家に参じて座禅をして悟りを得ること。

(51) 碧巖百則 北宋初期の雪竇重頭（九八〇～一〇五二）の編著『雪竇頌古』中の本則と頌に対し、北宋晩期の圓悟克勤（一〇六三～一一三五）が垂示・著語・評唱を付した『碧巖録』は百則かなり、禅の教科書とも云えるもので、一三〇〇年には既に刊行された。日本に於ては五山版等で再刻され、禅の代表的な公案の書として『從容録』・『無門関』と共に使われている。

(52) 公案 禅宗では万人の執るべき道理を表示するものの意に用い、祖師の言句・問答などを指し、特に臨濟禅では参禅者に参究テーマとして授けた。

(53) 溘然 にわかなるさま。突然。

(54) 契會 結びあうこと。ここでは、印可を受けること。

(55) 竹篋 割った竹を合わせたもので、罰具に用いる。

(56) 許多話頭 多くの、公案。

(57) 會下 一人の師家の下に集まり修行する所。又、その弟子。

(58) 豁然 疑いや迷いなどがからりと解け開くさま。

(59) 投機偈 師家の啓発によって修行者が悟りを開いた時に、師弟

の心のはたらきが契合したところを偈（五字または七字を一句とし、多くは四句を以て一偈とする韻文）によって云い表わす。

(60) 痛棒 座禅の時、気が散って落ち着かない者を打つ棒。

(61) 五須彌 五つの須弥山。須弥山とは、教説話において世界の中央にそびえ立つと云う大きな高山。

『碧巖録』第二〇則に「或有箇漢出來、掀翻大海、踢倒須彌、喝散白雲、打破虚空、直下向一機一境、座斷天下人舌頭、無你近傍處」とある。

(62) 位 あるべき所。いるべき所にいる。

(63) 百丈・黄檗 禅林清規の開創者である百丈懷海（七四九～八一四）とその弟子である黄檗希運（生没年不詳）。希運の弟子に中国臨濟宗の始祖臨濟義玄（？～八六七）。

(64) 闡大機發大用 『百丈語録』に「滄山問仰山、百丈再參馬祖、豎拂因縁、此二尊宿意旨如何。仰山云、此是顯大機之用。滄山云、馬祖出八十四人善知識、幾人得大機、幾人得大用。仰山云、百丈得大機、黄檗得大用」とあり、大機は宗旨を明らかにした境遇を、大用は修行者を接化する枝倆を云う。

この所の文章表現は、晦巖智昭編『人天眼目』二の「臨濟宗者、大機大用、脱羅籠出窠臼、虎驟龍奔、星馳電激、轉天關、斡地軸、負衝天意氣、用格外提持」の部分を用いている。

(65) 羅籠 心や身の自由と安らぎを妨げる煩惱と妄想の喩え。

(66) 窠臼 穴はこの意で、文字や言句に執着して自由を失うこと。

(67) 卷舒擒縱 卷舒は巻くことと延べることで、屈伸・進退などの

の意味。擒縦は捉えることと放つことで、殺活などの意味である。

「碧巖録」第二二則には「擒縦非_レ他、巻舒在_レ我」とある。

(68) 本分 本来具有する分際。本来の姿。

(69) 綿綿密密 行いが些事をもゆるがせにせず、細かく行き届くこと。綿密。

(70) 松源 松源崇岳（一一三二—一二〇二）。中国臨濟宗揚岐派の流れをくみ、虎丘紹隆の法系に属する松源派の派祖。

(71) 藏主 心を知る友人。人の師範となるべき人。

(72) 朝參暮請 朝夕、師家のもとに参じて親しく指導を受けること。

(73) 大徹大悟 大いに明らかにし、真理を悟る。

(74) 領略 うけとる。合点する。

(75) 従上 今までの。今日までの。

(76) 嶮峻 けわしい。

(77) 一著子 一つの見識、主張。禅体験から出た一句のことで、ここでは景川の投機の偈を指す。

(78) 種艸 仏祖の法を嗣ぐ人物を植物の苗に喩えたもの。

(79) 法幢 仏法を広める中心の旗。

(80) 法炬 仏法が無明の闇を照らすたいまつに喩えたもの。

(81) 化導群盲 愚かなる人々を、仏道へと導き入れること。

(82) 珍重 別れを告げる言葉。お大事に、の意。

(83) 佛成道日 釈迦が悟りに到達した日。一二月八日。

(84) この雪江が景川に与えた「臨濟正宗…爲證明」の印可状は、一七六五年に禅悦が編集した「仏日真照禪師雪江和尚語録」にも採

録されている。それと「行状」とを対比してみると、自從—自、

綿綿密密—綿綿的的、山野—山僧、宗隆藏主—如宗隆藏主、朝參—晨參、荷担正宗—荷担正法、大法幢—此大法幢、爍大法炬—然此大法炬、起—振起、者也—者必也、雪江—雪江叟、證明—證明而已（後記の太文字が「語録」と部分的に表現が異なっている。

(85) 印證 印可証明の略。これによって修行者は師家の資格を得たことになり、禅の指導をすることが出来る。

(86) 酬對 応答する。酬答。

(87) 機鋒 鋭い矛先。ここでは、鋭い気力や言葉のこと。

(88) 群衲磨臻 多くの僧侶が、群がって集まる。

(89) 四海鶴望 全世界が、首を長くして望むこと。

(90) 和之甲族 大和国（現在、奈良県）の、すぐれた一族。

(91) 越智匠作榮家 大和の高取に本拠地を置いた戦国大名越智家榮。

底本の、本文には「榮家」となっているが、頭注に「興雲寺鐘銘、榮家作家榮」とあり、越智家榮が正しい。なお、匠作は太政

官制の職原抄制における修理職の唐名。

(92) 日夕勤于参扣 昼も夜も、師に参じてその門をたたたく。

(93) ト一牛鳴地 一匹の牛の鳴き声が聞こえてくるような、あまり

遠くない所を、選ぶ。

(94) 興雲 この寺は現在、黄檗宗になって越智山光雲寺。

(95) 大徳 現在、京都市の龍宝山大徳寺。

(96) 綸綍 詔勅。

(97) 玉音重降 天皇の言葉（詔勅）が、再び出される。

- (98) 妙心 現在、京都市の正法山妙心寺。
- (99) 丹之龍興 丹波国（現在、京都府中部と兵庫県東北部）の米山（八木山）龍興寺。八木の二字を合わせて米となる。
- (100) 叢規井井 叢林（禪寺）のおきては、しっかりしている。
- (101) 細川右京兆政元 室町時代後期の武将。勝元の子。
京兆は左・右京職の唐名で、政元は右京職・管領をした。
- (102) 大心精廬 長松山大心院。当初は京都市中の細川政元の領内にあったが、一六世紀後半に妙心寺の山内へ移された。
- (103) 萱堂 母親の部屋。母親。
- (104) 盡七 尽七日。七七忌。
- (105) 大祥忌 死後満二年の忌日。三回忌。
- (106) 陞座 説法者が定められた座に登ること。
- (107) 元本無明 根本が、無知で真理にくらいこと。
- (108) 牢關 堅固にして打ち破って通過しがたいものの意で、思慮分別をもつては通過到達することの出来ない境地。
- (109) 特芳 特芳禅傑（一四一九〜一五〇六）。雪江宗深の弟子で、景川の法弟。
- (110) 西浦肅・春江蓓・悦堂懌 西浦宗肅・春江紹蓓・悦堂宗懌。
一八五四年に悦叟妙怡が著わした「龍宝山大徳禅寺世譜」及び大修館書店発行「禅学大辞典」の「日本禅宗各派本山世代表」によると、西浦は大徳寺五五世、悦堂は六三世の住持となっているが、春江の住持は記載されていない。
- (111) 柏庭松・松嶽繕・景堂訥 柏庭宗松・松嶽宗繕・景堂玄訥。
- (112) 大修行書店発行「禅学大辞典」の「日本禅宗各派本山世代表」によると、柏庭は妙心寺一九世、松嶽は一五世、景堂は二九世の住持となっている。
- (113) 視篆 新しく住持（住職）が入寺する時、その寺の寺印（篆）を受け取って視ることから、住持となることを意味する。
- (114) 清巖以・嬾室牧・啓菴迪・月谿紀・高安邵・景趙諗 清巖宗以・嬾室牧・啓菴明迪・月谿宗紀・高安玄邵・景趙宗諗。
- (115) 輶晦 才知・学問などをつつみくらしめて外に現わさないこと。
- (116) 昭昭 明らかさま
- (117) 碧落碑 中国山西省新絳の龍興寺にある石碑。唐の高祖李淵の子韓王元嘉の四人の息子が先妃（母親）のために作ったと伝えられ、陳維玉の書と云われるが、一説には黄公譔の書と云う。
- (118) 龍泉塔司 塔司は塔頭の管理者。景川宗隆の塔頭である龍泉は、京都の妙心寺（龍泉庵）にも犬山の瑞泉寺（龍泉院）にもある。
- (119) 景堂老禅 景川の弟子であった景堂玄訥（？〜一五四二）。老禅は尊称。
- (120) 天文丙申 一五三六年。
林鐘 陰曆六月。